

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：32668

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23653157

研究課題名（和文） 認知症グループホームにおける住環境配慮の効果指標の開発

研究課題名（英文） A study on the development of effective indicators of living environment considerations in dementia group home

研究代表者

下垣 光 (SHIMOGAKI HIKARU)

日本社会事業大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：30287792

研究成果の概要（和文）：認知症グループホームにおける効果的な環境の特徴を明らかにすることを目的として研究をおこなった。全国 11 ホームの Professional Environmental assessment Protocol(PEAP)の日本版 PEAP3 を用いた訪問調査と福祉サービス第三者評価の評価結果における環境要素の分析をおこなった。結果として外出することなどの地域との交流する点、職場環境としてしての整備なども認知症グループホームの環境整備の要素として含まれることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：I inquired for the purpose of clarifying the feature of the effective environment in a dementia group home. The environmental element in the evaluation result of a door-to-door survey using Japanese version PEAP3 of Professional Environmental assessment Protocol (PEAP) of 11 home across the country and social-welfare-services third-party evaluation was analyzed.

The environment of the group home of elderly people with dementia, it can be exchanged with areas such as that to go out, it should develop that I use as a work environment is included has been revealed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：認知症 グループホーム 環境評価

## 1. 研究開始当初の背景

高齢化社会における高齢者人口の急速な増加は、必然的に認知症高齢者の増加を伴い、2015 年には自立度Ⅱ以上の認知症高齢者が 250 万人に達することが予測されている。認知症症状に対する効果的な支援として、施設処遇の役割は依然と大きな一角を占めている。これらの認知症高齢者へのケアにおいて、グループホームなどの小規模の居住形態が大きな効果があるとされており、その特性として、生活の継続性を意識した支援形態や、従来型の施設が持つ特性である「隔離」、「管

理」、「集団」への対極といえる環境特性があることが知られている。我が国でおこなわれている施設環境の研究の多くは、物理的特性に絞られたものが多く、その運用や体制に踏み込んだ客観的な研究は少ない。

児玉らは、痴呆性高齢者ケア環境の評価尺度の開発を体系的に行った研究をおこない、米国において痴呆性高齢者ケアユニットの環境評価尺度として開発された Professional Environmental assessment Protocol(PEAP)の日本版の環境指針である PEAP3 を開発した。PEAP の環境指針は、

特別養護老人ホームなどの施設の支援環境としての特性を明らかにしているものといえる。集団的処遇から、「家庭的」な環境、小規模な空間などの側面を強調することが、症状の緩和などに効果的な影響を与えることが指摘されている。しかしながら、これらの環境特性は、単に物理的か環境因子だけでなく、介護職の関わりなどの心理社会的環境や、方針や理念の存在、チームアプローチや効果的なミーティングなどの運営的な環境の比重が大きいことも指摘されている。

## 2. 研究の目的

本研究では、特別養護老人ホームの支援環境の指針である日本版 PEAP3 を用いて、効果的な施設環境とされるグループホームへの支援環境の形成における環境因子の特性を訪問調査により明らかにし、さらにグループホームにおけるサービスの質の評価結果の分析により支援環境整備の方向性を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

### 研究 1：PEAP 3 を用いた訪問調査

鹿児島県内 4 ホーム、東京都内 4 ホーム、中国四国地方 3 ホームの合計 11 ホームへの訪問調査をおこなった。調査対象の認知症グループホームの選定は、認知症介護指導者研修を終了している指導者で、現在グループホームの管理者ないし計画作成者に対して研究協力を依頼し、返答が得られたホームを対象とした。これらのグループホームは、認知症介護についての意識が高く、積極的にその支援方法について検討をしている点に特徴があり、かつ研究の主旨に対して、「環境特性」に対して関心があることが、依頼の際に確認されている点に特徴がある。訪問調査は、2 時間程度の施設評価と 1 時間程度の指導者へのインタビュー調査によりおこなわれた。なお、調査に際して、研究が利用者の個人情報扱わず、ホームの環境特性であること、また研究成果の開示などについての説明をおこない、同意が得られている。

### 研究 2：第三者評価からみた認知症グループホームの環境要素の分析

本研究では、東京都における福祉サービス第三者評価の公表された認知症高齢者グループホームの評価結果の内容を分析することにより、サービスの質における環境要素がどのようなものであるかを明らかにするために研究をおこなった。

#### 1) 分析対象

とうきょう福祉ナビゲーション

(<http://www.fukunavi.or.jp/fukunavi/>)

にて公開されている福祉サービス第三者評価の結果のうち、平成 23 年度に外部評価を

受けた認知症高齢者グループホーム<sup>1)</sup>を取り上げた。「事業評価」に関する評価のうち、「全体の評価講評」に含まれる「特に良いと思う点」に関する 332 施設の 3707 記述と「さらなる改善が望まれる点」に関する 335 施設の 3435 記述を分析対象とした。また認知症グループホームの環境要素と比較するために同様に特別養護老人ホームの評価結果の記述も対象とした。「特に良い点と思われる点」の 404 施設の 3526 記述、「さらなる改善が望まれる点」に関する記述数が、3480 記述であった。

#### (2) 分析方法

まず、分析 1 として、形態素解析を行い、分析対象としたテキストデータで使用されている語の出現頻度を求め、認知症高齢者グループホームと特別養護老人ホームにおけるサービス評価に用いられる語の特徴を捉えた。次に、分析 2 として、「環境」という語と強く関連している語を明らかにするために、共起(共出現)関係について分析した。分析には、テキストデータを計量的に分析することが可能な KHCoder を用いた。

倫理的配慮としては、分析対象としたデータは、広く公表されているデータであり、データ収集にあたる倫理上の問題は発生しないと判断される。ただし、分析対象とするテキストデータの中に、施設の名称や固有名詞が含まれるものがあつた。これらについては、施設名や地域等が特定されぬようデータを加工し、分析に用いた。

## 4. 研究成果

訪問調査における PEAP 3 の全体的な評価を示す。なお PEAP 3 とは、8 つの次元で構成されており、米国版ではそれぞれが 5 段階の評定をおこなうものであり、今回の調査では調査者 2 名により訪問し、合議によりその評定をおこなった。報告では各次元の特徴について示す。

### < 1. 見当識への支援 >

この次元の内容は、「利用者(入居者と同様にスタッフや訪問者)が、環境の物理的・社会的・時間的次元の効果が、利用者の見当識を最大限に引き出すような環境支援について」の評価である。小規模な構造は、空間の把握をしやすい特性を有し、各ホームがそのしつらえに工夫をこらしている。また窓が大きく、外の様子がみえるため、自分がどこにいるかは比較的わかりやすい視覚の構造であることも少なくない。居室入り口には、それぞれの個性あふれる装飾が施されていることも目立っている。

また、時間や空間の認知に対する支援は、ほとんどのグループホームでおこなわれており、見当識への支援は、認知症グループホームの特性を反映しやすい評価次元といえ

る。自分の部屋を識別しやすいように、インテリア（ベッドカバー、カーテン、壁の色など）に変化をつけることは、居室における個人的なものの持ち込みの実際が反映されやすいため、その個人またはホームによる差もややある傾向にある。

#### < II 機能的な能力への支援 >

日常生活動作（移動、整容、排泄など）への援助において、入居者の日常生活上の自立活動を支え、さらに継続していくための環境支援についての次元である。この次元の基本的特性は、認知症グループホームのケアの方向性と一致する点が多い。自立度が比較的高い入居者が多いホームでは、それぞれの入居者ができること（買い物、洗濯干し）をできるような関わりがされていた。鴨居にかけたフックに洗濯ハンガーをつけ、長さを足すことで、いすに座ったまま洗濯を干すことができるように工夫するなど、能力を活かした環境づくりがされている傾向が目立つ。評点はほぼ5に近いレベルのホームが多い。

セルフケアへの機能的能力の支援は、浴室およびトイレに関する手すりや洗面台、シャワーの位置などの工夫も少なからずみられ、居室における洗面台があるところは、個人的に使える洗面用品などがみられている。しかし居室そのものにトイレや洗面台が診られるホームが多いわけではなく、基本的構造としてこの点を強調する下位項目が重視されるべきであると考えられる。

一方、調理、洗濯、買い物などの活動の支援における環境整備は、調理や洗濯、買い物などの日常生活において必要な行動を、できるだけ自立してできるように環境支援に特徴があり、入居者が容易に近づきやすい場所に、使いやすい掃除道具（ほうき、ちりとりなど）を用意することや、入居者が使いやすい洗濯機、物干場、洗濯物をたたむ場を用意するなどが含まれる。しかし認知症グループホームにおいてこれらの収容するための空間的な余裕がない場合があり、廊下やリビングの一部である畳スペースを使用せざる得ない場合もある。

また米国の特別養護老人ホームでは機能的能力の支援のための環境整備としてあげられている、施設内でお金を使う場所（喫茶店や売店など）を用意し、それらの店に車いすでも行くことができる、という下位項目は、外出をし商店やスーパー、コンビニエンスストアに行くことにより、その能力の支援になることがある。外出によりその機能的な能力の支援につながる中項目として再構成することも考えられる。

#### < III 環境における刺激の質と調整 >

入居者のストレスにならない刺激の質や、その調整について。この次元は、「環境における刺激の質」と「環境における刺激の調整」

のふたつにより構成されている次元である。視覚刺激の調整や質は、窓が大きいホームでは、どの場所においても外の様子を眺められる。また、日当たりがよく明るい雰囲気を感じられることが多い。これらの構造は居室とリビングの配置により異なるものである。

ホームにより大きな違いがあるものは、聴覚刺激の調整である。リビングが吹き抜けているユニットや扉があるが開放されており場合など、スタッフの声やレクリエーションの歌声、移動のための足音などが響いてしまう場合も少なくない。

また居室にトイレがあるが、完全にトイレが区切られているわけではなく、上部は居室スペースにつながっている場合に、居室内に排泄物の臭いがこもる可能性ある。訪問調査したホームでは、このような構造の時ににおいても、臭いがこもっていないこともみられた。このホームでは、マメに掃除をし、おむつは極力つかわないことで、排泄物の臭いがカットすることを意識していた。これらのことから物理的環境整備とケアが連動することが環境支援において重要であるといえる。

#### < IV 安全と安心への支援 >

入居者の安全を脅かすものを最小限にするとともに、入居者はじめ、スタッフや家族の安心を最大限に高めるような環境支援についての次元である。

入居者の見守りのしやすさについては、基本的には構造的にそれほど広いわけではないので、スタッフが自然な方法で入居者の状況や活動を容易に見守りやすいことがグループホームの環境の特徴といえる。特に多くのホームが出入り口が見やすいところにスタッフルームを配置していることが多く、見えにくい場合に出入り口の解放時にアラームなどが鳴る場合がある。

また安全な日常生活の確保の中項目においては、入居者の移動や移乗を支援するための手すりが、廊下、トイレ、浴室、居室などにある、という下位項目はグループホームに限らず特別養護老人ホームにおいても目立つ環境整備である。しかし一方、収納が足りケースは少なく、廊下に使わない機器（リフト）や書類ケースなどが置かれていることや、居室の前にも置かれており、夜間や災害時には危険が伴うことが予測されるケースも少なくない。しかしながら、車いす歩行者や歩行器使用者が増えることを前提のレイアウト構造は、大規模な施設の印象を与えるものであり、ただ「広い」廊下を準備することは他の次元の環境要素を阻害することも考えられる。

#### < V 生活の継続性への支援 >

この次元は、入居者それぞれが慣れ親しんだ環境と生活様式を ①個人的なものの所有、②非施設的環境づくりのふたつの側面から

実現につながる環境要素である。

この環境要素は、認知症グループホームの最も代表的な環境の特徴を示している。入居前の生活を強く感じることでできる居室のしつらえ、最低限の生活必需品だけでなく嗜好品や趣味の道具などを持ち込むことはほとんどの認知症グループホームで意識されていることであった。しかしこれは同時に、大切にしている生活習慣には、外出することを継続できるためのものであるという点も含まれることが興味深い。印象的だったこととして、例えば「教会に行く」ということが生活習慣として維持されているだけでなく、教会と一緒にいく友人との関係性もそれにより維持されていたこともあった。

#### <VI 自己選択への支援>

物理的環境や環境の調整に関する施設方針が、個人的な好みやどこでなにをしようという、入居者の自己選択が図られるような環境支援について次元である。

この次元では、入居者への柔軟な対応や空間や居場所の選択、いすや多くの小道具の存在などが中項目としてあげられている。

ベットや布団などを入居前からの生活に応じて準備することや、食事や入浴時間を調整することなどの融通性を効かせた対応をおこなうことは認知症グループホームのケアの質そのものであり、この点は今回の調査に協力したグループホームにおける共通する高いレベルのケアの特徴であった。

また空間や居場所の選択は、認知症グループホームの基本的な特徴といえ、評価項目としては最低限の必要な項目としてあげておく必要があるといえる。

#### <VII プライバシーの確保>

入居者のニーズに対応して、ひとりになれるだけでなく、他との交流が選択的に図れるような環境支援について次元である。

この次元では、プライバシーに関する施設の方針が中項目として含まれている。これは特に運営的環境要素に含まれるものであり、その質は維持するにはスタッフの個人のケアの質だけでない。入居者のニーズに対応して、一人になれるだけでなく、他との交流が選択的に図れることも含まれる。個人の要望やニーズを踏まえた支援は、多くのホームで強調されているものであり、居室が個人的な空間として尊重されていることは認知症グループホームの環境要素として大きな意味があるといえる。

この点において居室におけるプライバシーの確保には、ホームによる差がある。各居室にトイレが設置されているのは少ない。これは居室で排泄ができることにつながり、それはまた排泄方法や必要なパットなどは人により事なるので、それぞれが使いやすいよう排泄用品の収納や置き方の工夫がされ流

環境整備が求められる。

#### <VIII 入居者とのふれあいの促進>

入居者の社会的接触と相互作用を促進する、環境支援と施設方針についての次元である。ふれあいを引き出す空間の提供、ふれあいを促進する家具やその配置、ふれあいのきっかけとなる小道具の提供、社会生活を支えるという中項目により構成されているが、不例を引き出すための空間や家具、小道具などの構成要素に加えて、地域環境との接点が注目される点に認知症グループホームの特徴がある。

いくつかのホームでは地域の自治会に加入しており地域の祭りや会合に入居者方が定期的に参加するなど地域とのつながりを作る工夫は常にしている。また中庭のスペースをうまく使い地域の方をイベントにお招きしたり、家族会開催時に活用したりしている場合もある。さらにデイサービスや小規模多機能などの施設を併設している場合、グループホーム入居者が、「遊び」について日中すごしたりすることも大きな環境整備による効果といえる。近所の自宅の様子を見るためにひとりで外出する、入居者が商店に行き手伝いをするなど、近隣の地域との連携が出来る環境がつけられることが、認知症グループホームにおいて欠かすことの出来ない環境特性であると考えられる。

## 研究2. 結果

### (1) 分析1

#### 1) 「特に良いと思われる点」に関する頻出語

形態素解析の結果、グループホームについては、3922 記述が 128389 個に分解され、抽出された語の種類は、5932 個であった。特別養護老人ホームでは 102987 個に分解され、抽出された語の種類は、5425 個であった。うち、助詞や感動詞など単独では意味のとれない品詞は分析対象から除き、名詞およびサ変名詞について頻出語を求めた結果、「利用(カッコ内は出現数:1863)」、「職員(1118)」、「ホーム(718)」などであった。特別養護老人ホームでは、「利用(1260)」、「職員(954)」、「施設(610)」であった。

#### 2) 「さらなる改善が望まれる点」に関する頻出語

形態素解析の結果、3648 記述が 118509 個に分解され、抽出された語の種類は、4668 個であった。特別養護老人ホームは、形態素解析後総抽出語数が 100526 個であり、抽出された語が 4766 個であった。グループホームでは、「特に良いと思われる点」と同様に語の選択を行った結果、頻出語は、「職員(1318)」、「利用(1034)」、「ホーム(586)」などであった。特別養護老人ホームでは、「職員(1200)」、「利用(851)」、「施設(554)」

であった。

(2) 分析2

「環境」との共起関係を明らかにしたところ、以下の表に示す結果となった。

表1 特に良いと思う点の「環境」との共起 (認知症グループホーム)

	抽出語	名詞	全体	共起	Jaccard
1	整備	サ変名詞	57 (0.015)	11 (0.125)	0.0821
2	快適	形容動詞	22 (0.006)	8 (0.091)	0.0784
3	自立	サ変名詞	56 (0.015)	9 (0.102)	0.0667
4	生活	サ変名詞	484 (0.130)	33 (0.375)	0.0612
5	安心	サ変名詞	116 (0.031)	10 (0.114)	0.0515
6	職場	名詞	17 (0.005)	5 (0.057)	0.05
7	出来る	動詞	87 (0.023)	8 (0.091)	0.0479
8	入居	サ変名詞	267 (0.072)	16 (0.182)	0.0472
9	安全	形容動詞	73 (0.020)	7 (0.080)	0.0455
10	居室	名詞	53 (0.014)	6 (0.068)	0.0444

表2 さらなる改善が求められる点の「環境」との共起 (認知症グループホーム)

	抽出語	名詞	全体	共起	Jaccard
1	安定	形容動詞	23 (0.006)	5 (0.091)	0.0685
2	福祉	名詞	31 (0.008)	5 (0.091)	0.0617
3	職場	名詞	19 (0.005)	4 (0.073)	0.0571
4	変化	サ変名詞	59 (0.016)	6 (0.109)	0.0556
5	法律	名詞	3 (0.001)	3 (0.055)	0.0545
6	自立	サ変名詞	24 (0.007)	4 (0.073)	0.0533
7	整備	サ変名詞	107 (0.029)	8 (0.145)	0.0519
8	居心地	名詞	6 (0.002)	3 (0.055)	0.0517
9	与える	動詞	9 (0.002)	3 (0.055)	0.0492
10	非常	形容動詞	11 (0.003)	3 (0.055)	0.0476

表3 特に良いと思われる点の「環境」との共起 (特別養護老人ホーム)

	抽出語	名詞	全体	共起	Jaccard
1	整備	サ変名詞	49 (0.017)	13 (0.194)	0.1262
2	整える	動詞	31 (0.011)	8 (0.119)	0.0889
3	組織	サ変名詞	65 (0.022)	7 (0.104)	0.056
4	経営	サ変名詞	66 (0.023)	7 (0.104)	0.0556
5	居室	名詞	49 (0.017)	6 (0.090)	0.0545
6	設置	サ変名詞	35 (0.012)	5 (0.075)	0.0515
7	職場	名詞	18 (0.006)	4 (0.060)	0.0494
8	意見	サ変名詞	89 (0.031)	7 (0.104)	0.047
9	運営	サ変名詞	74 (0.025)	6 (0.090)	0.0444
10	改善	サ変名詞	78 (0.027)	6 (0.090)	0.0432

表4 さらなる改善が望まれる点の「環境」との共起 (特別養護老人ホーム)

	抽出語	名詞	全体	共起	Jaccard
1	整備	サ変名詞	103 (0.036)	19 (0.271)	0.1234
2	改善	サ変名詞	128 (0.045)	16 (0.229)	0.0879
3	変化	サ変名詞	36 (0.013)	7 (0.100)	0.0707
4	生活	サ変名詞	193 (0.068)	17 (0.243)	0.0691
5	職場	名詞	23 (0.008)	5 (0.071)	0.0568
6	快適	形容動詞	15 (0.005)	4 (0.057)	0.0494
7	踏まえる	動詞	18 (0.006)	4 (0.057)	0.0476
8	適切	形容動詞	44 (0.016)	5 (0.071)	0.0459
9	活かす	動詞	29 (0.010)	4 (0.057)	0.0421
10	労働	サ変名詞	6 (0.002)	3 (0.043)	0.0411

## 研究2：考察

本研究では、サービス評価における環境要素に着目した分析を行った結果、全体の講評に占める「環境」という語の出現回数に限られていることが明らかになった。また「環境」という語と共起関係にある語を検討した結果、「安心」、「快適」、「自立」など認知症高齢者グループホームのケアの質の評価において欠かせない要素をもつ語との関連が示された。その一方改善を要する点としては、「安定」、「職場」、「福祉」などの運営的環境要素が目立っている点に特徴がある。特別養護老人ホームは、「組織」、「経営」、「居室」、「職場」、「意見」などの運営的環境要素がサービスの質につながる「良い」と思われる環境要素として考えられる。一方、改善を要する点として「変化」、「改善」、「生活」、「快適」などが挙げられており、高齢者の生活環境として快適さに問題があり、また生活における変化が「乏しい」ことなどの学習的環境の課題がある可能性が示唆された。

## 全体的考察

認知症グループホームにおける環境要素は、基本的な次元としてのPEAP3の環境特性を踏まえた次元でその質を考える場合、地域環境との接点を踏まえていくことが受容であるといえる。効果的なケアを展開しているグループホームは、機能的な能力の支援における環境整備においても、IADLの支援がホーム内にとどまらず、商店などの買い物などの外出とつながるものである。また生活の継続性への支援のための環境整備も在宅生活と同様の自治会の参加、友人などの訪問と連動することによりその支援は効果的になるものと考えられる。特にⅧ次元の「入居者とのふれあいの促進」は、「ふれあいの促進」とし、入居者だけでなく地域との接点を中項目に入れ、そのうえでの社会生活を支えるという項目に再構成することが考えられる。また第三者評価における環境要素の抽出からは、職場環境の安定や学習的環境としての側面が課題として考えられる。支援環境整備は、認知症高齢者の行動につながる物理的環境の整備に注目がされやすいが、PEAP3のプライバシーの確保の次元あるいは、あらたに運営的環境・学習的環境の次元として、「職場環境」の要素を設けることが必要であることが考えられる。今回の研究を踏まえて、認知症グループホーム版PEAPを作成する研究として、試行版を作成し継続していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書] (計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

下垣 光 (SIMOGAKI HIKARU)

日本社会事業大学・社会福祉学部・  
准教授

研究者番号：30536181

### (2) 研究分担者

該当者なし

### (3) 連携研究者

大島千帆 (OSHIMA CHIHO)

早稲田大学・人間科学学術院・助教

研究者番号：40460282